

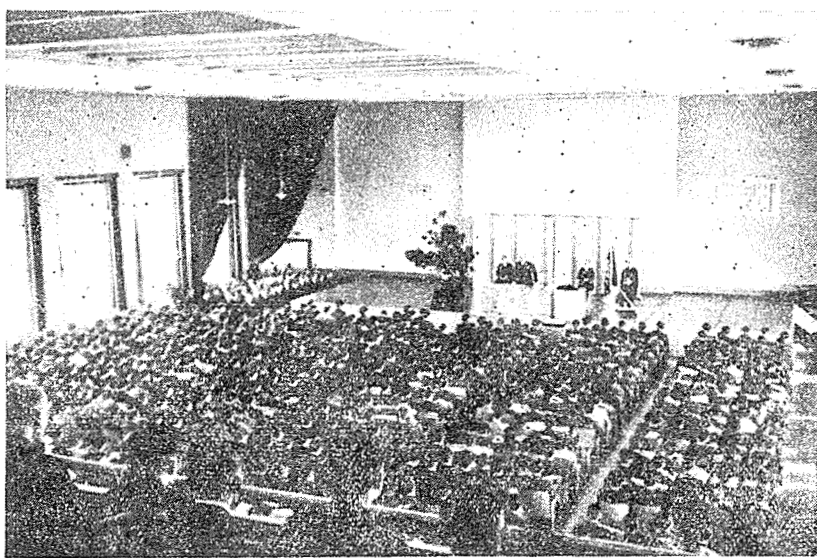
THE KANSAI UNIVERSITY BULLETIN

Osaka, March 15th, 1955. No. 277.

關西大學學報

昭和30年3月 第277号

昭和二十六年十月十五日第三種郵便物認可
昭和三十年三月十五日発行（毎月一回十五日発行）
通巻第二七七号



式授証書第三十二回

關西大學學報局

特別寄稿

大学の学問・対・大学教育

スタンフォード大学
ダビッド・ジャックス大学教育教授

ウィリアム・ハロルド・カウリー

The Higher Learning Bureau the Higher Education
W. H. Cowley
David Jacks Professor of Higher Education
Stanford University
Professor Hanns has sketched the concepts which he espouses as the
First Lee L. Jacks Professor of Child Education, but I have a somewhat

(承 前)

昨年の秋以来この序説的課程は管理上大学院に置かれるようになったが、講義を始めた当初から、それを受ける大学院学生は教育学部以外の学部から来たものが殆んどであった。この三ヶ月間七つ

の学部、即ち美術、生物学、経営管理、化学、教育、英文学や浪漫主義言語等の学部の学生が聴講している。すべての学生が教職の経験をもつていて、大学教育機関にいたものが二三あり、現在スタンフォードの教授職にあるものも若干いる。例えば工学部の一つに籍を置く一人の教授と一人の助教授とがこの課程と他の大学教育講座の数の課程をうけている。他のこれらの課程は大学(単科及び総合)の管理、行政、構造、カリキュラム、制度の諸問題や学生の福祉増進事業等に関している。三人の若い教授、即ちフー

ヴァー研究所及同図書館長補佐アーニスト・B・オウバイン博士、教育及スペイン語助教授イザベル・M・スキヴィル博士と学長補佐 (Assistant to the President) ロバート・J・ウワート博士らが、私と交替々々でこれら五つの課程を教えている。バートキー及びキニー両教授も亦大学教育機関に関する課程を講義し、バートキー教授はジュニア・カレッジを、キニー教授は教職課程の機関を受持つている。

五

私自身特に関心をもっているのは、さきに概略を述べた序説的課程ともう一つ他の、現在「大学教育の構造」といつている課程とであるが、後者はあるいは「アメリカ大学教育の構造、機能及び目的」と改称した方が適当かも知れない。実際私のやつていることはこの課程を軸として回転している。私が研究を始めた動機の大部分はそれであつて、スタンフォードで九年间に私の指導した三十五の博士論文のうち十四は、それに關した問題を取扱つている。*

* 沢山の他の研究が完成した時に、十一年前カーネギー財団より送達された書物を著すことが出来るであらう。二三の同僚は出版の遅れているのを所謂「完壁主義」の所為にしているが、しかし私の考へては手持ちの原稿が不十分なものであれば、それを出版して結局、なんとかしてわれわれの所謂「浅学非才」にけちをつける機会を待ちかまえている教育学者たちに、別な非難的的を与えることになるだらうとおもうだけである。

私が焦点とみなしているこの課程には、解決の手がかりを与える言葉が二つある。即ち多様性 (diversity) と衝突 (conflict) とである。それはアメリカ大学教育

ウィリアム・ハロルド・カウリー博士は、一八九九年生れ、ダートマウス(文学士)、シカゴ(哲学博士)、ハミルトン(法学博士)、ホバート(人文科学博士)、ユニオン(文学博士)等諸大学に学び、シカゴ大学就職幹旋課長、オハイオ州立大学心理学助教授及び同教授、ハミルトン大学長を歴任、現在スタンフォード大学教育学部において大学教育學を担当し、「大学教育の管理」、「大学教育行政」、「アメリカの単科大学と総合大学」、「大学教育の構造、機能及目的」、「大学教育科目」、「大学教育職員の福祉増進事業」(いづれも四単位)等につ

いて講義し、将来の大学教授や大学教育行政家の養成につとめている。なお、博士はカーネギー財団より大学教育に関する書物を著わすよう奨励されている。本論文は本「関西大学學報」のため特に執筆されたもので、アメリカにおいても未だ発表されていないが、本年刻々オハイオ州立大学教育学部編集「大学教育論叢」に発表されることになるであらう。博士が関西大学及び「関西大学學報」のため特に寄せられた好意に對し、衷心より敬意と甚深なる謝意とを表す。

の多様性を明かにし、単科及び綜合大学の構造、機能及び目的等の間に充滿している衝突を確かめる。ヨーロッパ人たちが了解に苦しむらしい構造的な多様性については既に闡説したが、暫く現在の構造的衝突について二三考えてみよう。

ロバート・メイナード・ハチンス (訳者註 前シカゴ大学総長、ロッキンジャー財団理事) は二十五年間、小学校から大学までアメリカ教育の完全な再構成、いいかえると、従来の教養大学を二つに分けて、一年次と二年次とを高等学校に、三年次と四年次とを大学院と職業学校とに譲り渡すという再編成を主唱して来た。ハチンス氏によれば、手順として七百からある教養大学の殆んどをジュニア・カレッジに改造するが、若干はマスターの称号を与える三ヶ年の構造をもつ学校として続くことになるだらう。(10) このような計画が沢山、ハチンス氏のような名声のある人々によつて一世に亘り強く主張されて来たが、教養大学はこれら自滅に等しい提案をうけ容れなかつた。綜合大学と雖も一年次と二年次とを手離すのを喜ばなかつた。偶々スタンフォードの学長が二人まで、本学の低学年を手離そうと五回も計画して不成功に終つたが、その最後の試みは一九三九年に行われたものである。

殆んどこれと同じ年にハーヴァードのコンラント氏 (訳者註 前ハーヴァード大学長、現駐独米國高等弁務官) が構造上の問題に興味をもつようになり、間もなく彼の改革試案を奨励し始めた。彼もまた七百の教養大学の消滅を考えているらしいが、彼はハチンス氏のジュニア・カレッジを高等学校三年次に始まる四年制学校に改造するという提案には同意せず、その代り一つの決定的な相違を除いては、ジュニア・カレッジを現状のままにして置く考えである。コンラント氏の計画では、所謂

「教養ある指導者」となる能力のある聰明な少年たちはみな高等学校から直接大学へ進むことになり、そうでないものは誰でもジュニア・カレッジに行くことになるが、この場合ジュニア・カレッジはもはや将来所謂「教養ある指導者」となるような者を入学させないで、彼の言葉を繕うと、次のような職業を選ぶ人々に奉仕することになる。

将来の、熟練した労働者、あらゆる種類の修理を含む技術家、秘書、会計士、家庭主婦、食堂経営者、セルスマン……(4)

コンラント氏、ハチンス氏や他の人々がこのような根本的変革を提案する理由を理解するためには、教育構造論の問題から教育機関が行う諸機能の検討へ移らなければならぬ。学校と対照すると、単科及び綜合大学は無制限といつてよいほど複雑な構造をもっている、というのは、それらの多くが非常に大きな形態をしているばかりでなく、主に学校の行わない数種の機能を果すからである。これら附加的な機能のうち、研究が第一位を占めることは大多数の人の認めるところであり、多くの教授たちや大学行政家の若干の人々もそれを教育機能よりも余程重要なものとおもっている。本論文の表題の言葉を使うと、大学の学問即ち知識開発の機能の方が、大学教育即ち大学の学問を学生に伝達する機能よりも、たとえ本質的ではないにしても、もつと主張されてよいと彼等は信じている。

実際、教授たちの中にはその熱意のすべてを大学の学問に捧げて、教えること即ち大学教育を、自分の研究を妨げる場合には、等閑にしてよい雑役だと考えている人も二三に留まらない。私はこの考えを非難としてではなく、寧ろ多くの人々によつてなされた考察の一つの報告だともう、と急ぎ指摘しておかう。それ

ら人々のうちの一人、アメリカ学術会議名誉理事ウィールド・G・リーランド博士をこゝに引合いに出さう。大学の学問と大学教育との衝突の責任は大学院にあるとして、リーランド博士は二三年前、

わが国の学者の殆んどが……養成されるのは教養学大学院においてであるが、大学院の空気が教育を天職とみなそうとする学者の養成には積極的ではない。彼等はそれを仕方のないこと、……いいかえると、研究に全力を捧げるため生計をたてる不本意な手段……とみなし勝ちである。これこそ、平凡な程度で知識(の発達)になんら特筆大書すべき貢献を成し得ないことの方が多い研究に、支払われるには高い代償である。(12) といつてゐる。

私は単科及び綜合大学の一学徒として、大学の学問と大学教育との衝突において、どちらかに加担しようとするものではない。殆んど三千年間私はそのいづれにも関与して来たので、いずれも等しく重要であり、等しく本質的であり、等しく大学に必要であるとおもう。だがそれらは現実に衝突しており、アメリカ大学教育の最も緊要で、最も必然的な諸問題が、この衝突の問題に集約されるようにおもわれる。だから私は出来るだけ学者として公平にこの衝突を研究してみよう。

ハチンス、コンラント両氏は、彼等の計画こそ、他のいろいろな問題はさて置いて、大学教育におけるあらゆる軋轢のうち、最も緊要なこの点を改善することが出来るという信念に基づいて、構造上の再編成を厳しく奨励して来たのである。しかしながら彼等の計画にはみるべきものがあるにも拘らず、そのどちらも第三の契機即ち目的という契機を充分考慮に入れていないため、採用されることのないのは明かなようにおもわ

れる。

単科及び総合大学は教育と研究との機能を、ただにそれらを行うためというのではなく、寧ろある目的を達成するか、または促進するために行っている。社会が新しい知識を求める抑え難い要求をもっているから大学は研究を続け、社会が研究によつて得られた知識を使用しようとするから大学は教育機関たるのである。されば研究の目的は大学の学問の量と質を増進することであり、教育 (teaching) の目的は、大学の学問を求めて経済に熟中する能力のある、出来るだけ沢山の社会の成員に、大学の学問の成果を伝達することである。

これら等しく重要な目的とそれに関係ある機能とが衝突しているのであつて、われわれはこの衝突の圧迫を終結させるか、せいぜい軽減すべく構造上の諸計画を進めようとしたが、うまく行かなかつた。この事実是他の一連の衝突を誘発するが、そのうちの一つだけをこゝに極く簡単に述べよう、即ち研究心の旺盛な教授たちの目的とするところと学生たちの目的との間の衝突である。私は愚鈍かまたは怠惰な学生についてではなく、過去二十年間を振り返つてみて大学創設当初の先輩たちより遙かに真面目な若い男女たちだといつてよい、わが国の優秀な単科及び総合諸大学にいる普通の学部学生と大学院学生とについて語らう。三十年代即ち戦争の不景気と不安な世界情勢とのために、ヘンリー・シードル・キャンビの言葉を籍ると、「アメリカ生活の現実に自分の研究を喜んで関係させ、またその能力のある」「よく仿ぎ、よく考える」学生を、しかも増加の傾向にある多数の学生を、教授たちは愛持つことになつた。^(2.1)

キャンビ氏は、教授の目的と学生の目的との間の矛盾に負けて、エール大学英文学教授の職を辞し、「サ

タデー・レビュー・オブ・リテラチュア」(Saturday Review of Literature) の編集者となつた。最近彼はこの衝突について一書をものしたが、私はそれから二つの章句を引用しよう。第一は教育 (teaching) に殆んど寄与するところがないといつてよいような、また——ハチンス、アブラハム・フレクスナー、ウォールド・リーランド諸氏や他の人々が主張するように——今日の問題によい対照とされ得るような種類の研究の極端な例を報告している。この第一の章句はキャンビの在職年間におけるエール大学英文学科の一教師の研究について語っている。

私は大学院にいる頃一人の所謂寓話作家を知つていた。その人は長年イソップ物語の原稿を比較し、「狐」の代りに「狼」を使うか又は「ライオン」の皮を着た驢馬の癖を使つて、それらの出所を次々と調べあげ、遂にヨーロッパ中世の全時代にわたる日附と影響との曲線を作つた。……それは一百の市街区割地にある煉瓦を数えるに等しいことであつた。しかし彼は幸福な人だつた。彼の仕事は無制限に展開して行つた。彼は決して完了しないだろうし又結論を出す必要もない。彼はよい判じ物を持つていたから教授の職が得られたのである。このケースは極端であるけれども、よい例であつた。^(2.2)

第二の章句は、

(きまつたカリキュラムの制限を受けない) 教授は教育史上恵まれた機会の一つを得たが、それを受けそこなつた。彼らは物理学者のために物理学を、生物学者のために生物学を、歴史家のために歴史を教えた。彼らは、専門家即ち教授ではなく、産業的、商業的、政治的アメリカの指導者たらんとするアメ

リカの青年たちには興味を持たなかつた。^(2.3)といつてゐる。

多数の総合大学、特にコロンビア、シカゴ及びハーヴァードは、広い教養を得たいという学生たちと研究を第一としてゐる教授たちとの間の衝突を調停することにこゝ数年間追われて来た。それらが成功して来たことが、アメリカ大学教育の将来についての私の考えを樂觀的にした理由の主なるものであるが、しかし道はまだ遠い、他の大学の殆んどは未だに手をつけていない。事情の改善も全国を通じてあまりにも遅きに失し、変化の速度もおそらくわれわれが多数の問題に解答を見つけるまで遅々たるものであるだらう。私が私の講義の焦点として単科及び総合大学の構造、機能及び目的というこの課程を選んだのは、それがこれら諸問題を明かにするからであつて、私は時間と資力との許す限り、出来るだけ多くのこれら諸問題の探求に研究を集中する。

ダビッド・ジャックス教授職の設置はこれらの研究を著しく促進することになるだらう。それはまた教授職が実質的に効果をもたらすような関心と援助とを増進してくれる望みを与える。唯これらの学科目が確実に設置されるようになって、奨学金、研究費や出版費が充分与えられる程普及するのに、私は何の異議もない。もしも教育学部が学問的でなければならぬのと一部の人がおもうほど学問的でないとしたら、おそらく学問的研究のための資金の少ないことが、その理由の一つであるかも知れない。

六

四百年前に、暫くの間であつたが、イングランドの二つの大学が僧院と一緒につぶされるかのようにおも

われたことがあった。しかし、かの意地悪な君主ヘンリー八世ですらも、そんなことをしようと提案した彼の廷臣たちを極力いましめた。彼は「諸子は僧院の領土にヒントを得て、これらの大学をもまた、いぶせうと齒のうくような考えをいだくようになったのならう。諸子よ、私の考えでは、イングランドにおびつわが大学にあたえられている土地ほど恵まれた土地はないとおもう。なぜなら、わが大学を維持することによつて、われわれの没した後といえども、わが王國は安泰であるだろう」といった。

ヘンリー八世時代のイングランドの生活に対してオックスフォードとケンブリッジとがなした以上に、浸透的にまた創造的に、今日のアメリカの単科及び綜合諸大学はわが國の生活と融け合つてゐる。これらの大学は、そのますます増大する重要なために、わが國文化の如何なる他の機関と同様、連続的にまた細心に研究されるに値する。リー・L・ジャックス嬢が二つの教授職を設けるようにしてくださつた厚意は、かかる研究を限りなく促進する一助となるであらう。

ダビッド・ジャックス教授職はアメリカ合衆國はいうに及ばず、實際、世界中において最初の大学教育の恵まれた椅子である。ダビッド・ジャックス氏はその生涯を通じて、カリフォルニア及びその諸機關の進歩のために、地味ではあるが測り知れないほどの貢獻をしたが、彼の名前の教授職の設定は幾世紀にわたり彼の声望を不朽ならしめるであらう。教授職の特異性と責任とを心に銘じて、私はその最初に使はれたものとして在職中、先見の明があり不撓不屈でしかも寛仁大度の人になさわしい、その功績をたたえるために努力しよう。

参考文献

1. Amherst College, Faculty of, "Two Reports to the Board of Trustees with the Doings of the Board Thereon," Amherst, Carter and Davidson, 1827, pp. 8-9.
2. Canby, Henry Seidel, Alma Mater: The Gothic Age of the American College, Farrar & Rinehart, 1936.
2.1: p. 239
2.2: pp. 204-05
2.3: pp. 88-89
3. Clark University Annual Register and Official Announcements, 1893, p. 45.
4. Conant, James B., "Our College System: A Re-Evaluation," The New York Times Magazine, June 4, 1950, p. 28.
5. Drucker, Peter F., "The Myth of American Uniformity," Harper's Magazine, May, 1952, p. 72.
6. Guerard, Albert, Education of a Humanist, Harvard University Press, 1949, p. vii.
7. Henry the Eighth of England, etc., quoted by Morison, Samuel Eliot, The Founding of Harvard College, Harvard University Press, 1935, p. 42 and Roberts, S. C., British Universities, Collins, London, 1947, pp. 16-17.
8. Holmes, Henry W., "The University and the Education of the Teacher," Teacher-Education Journal, Vol. 1, No. 1, 1939, p. 21.
9. Hook, Sidney, "Modern Education and Its Critics," address in Chicago, Illinois, February 12, 1954 to be published in the Seventh Yearbook of the American Association of Colleges for Teacher Education.
10. Hutchins, Robert Maynard in The William Rainey Harper Memorial Conference, edited by Robert N. Montgomery, University of Chicago Press, 1938, p. 116.
11. Johnson, Burges, Campus Versus Classroom, Ives Washburn Inc., New York, 1946, p. 298.
12. Leland, Waldo G., "The Present Task of the Humanities," School and Society, October 26, 1946, p. 283.
13. Rice, Mabel C. and Carlson, Neva A., "Earned Degrees Conferred by Higher Educational Institutions 1952-53," U. S. Department of Health, Education, and Welfare: Office of Education, 1954, pp. 1, 21, 23.
14. Russell, James Earl, Founding of Teacher College, Teachers College, Columbia University, 1937, p. 26.
15. Young, Burns Bryon, "The Rise and Development of Instructional Courses in Higher Education," unpublished doctoral dissertation, Stanford University, 1951.
15.1: pp. 51-59
15.2: pp. 111-15
15.3: pp. 115-16
15.4: pp. 128-43

(續訳) 野 堅 (二)

訳者註 本論文は最近アメリカにおける大学及大学教育論の一斑をうかがわしめるものであるが、わが國の現状と些か異なる点が見出されるとすれば、夫々の国状や、また文教政策、教育観などによるのであらう。特に大学及大学教育の目的については内部か外部かという問題点に達着するが、かゝる教育哲学上の論考は暫く措いて、本論文の考へはアメリカ民主主義の教育観に社会的目的観を加味して、現代の動向たる社会的創造主義の教育観(大学は社会形成のダイナミックな力であるといふような)への一つの息吹きを感じしめるものとなさるであらう。

學 内 報

定例評議員会

定例評議員会は、三月十七日(木)午後三時より天六学舎で開催され、昭和三十年度学校法人関西大学歳入出予算承認に関する件その他につき審議した。

出席者左の通り(敬称略・イロハ順)

中務平吉 榎本信雄 岩崎卯一 岩本公夫 池田信之助 春原源太郎 西尾専太郎 西本寛一 戸根泰雄 織田佐代治 大石雄一郎 大小島真二 和田豊二 桂忠雄 神屋敷民藏 四辻詮 中村正雄 長柄金吾 浪江源治 村尾静明 宇佐美正祐 矢野文雄 矢口家治 保井剛一 松葉徳三郎 松原藤由 政井武 福田繁芳 近藤政士 江里口春志 阿部甚吉 明石三郎 澤村栄治 木原繁実 木村健助 宮島綱男 三島律夫 白川朋吉 下条小野右衛門 平井三朗 久井忠雄 森川太郎 関豊馬 角田好太郎

第三十二回學士証書授與式

関西大学第三十二回學士証書授與式は三月十九日に、一部が午前十時より千里山学舎講堂、二部が午後三時より天六学舎講堂で、学歌、証書授与、学長訓示、文部大臣その他來賓祝辭、学友会賞授与、学友会功勞者賞状並賞品授与等の式次第で行われた。

なお学校法人関西大学の設置する関係学校の卒業式も左の通り舉行された。

三月二十三日午前十時 大 学 院

三月十八日午前十時 短期大学部
同 十三日午前十時 第一高等学校
同 十七日午前十時 第一中学校

安田教授渡米

経済学部安田信一教授は、昭和二十九年在外学術研究員として選ばれていたが、この程南紡績株式会社への嘱託を兼ねて、経済学研究並びに紡績経済事情の調査のため、三月十二日(土)午後零時半大阪駅発「はと」にて出発した。



大阪駅出発の安田教授

なお同教授は、アメリカ、イギリス、ドイツ等に向う予定。

関西大学第一高等学校講堂新築

昨年十一月二十日より着工した関西大学第一高等学校講堂は、三月十一日完成した。

本講堂は丘陵地にふさわしい亀甲型鉄

骨モルタル塗壁瓦葺平家建て、約百六十坪あり、音響効果を考慮して天井は張らず、鉄骨構造をそのまゝあらわして化粧とし構造美をみせた学校建築である。

人事異動

昭和二十九年十月一日付
昭和二十九年度後期本大学経済学部講師を委嘱する 生島広治郎
昭和二十九年十月十五日付
昭和二十九年度後期本大学経済学部講師を委嘱する 永島 清
昭和二十九年十月十五日付
学校法人関西大学助手規定第八条により任期満了になるも同条及第参条により再任を命ずる 助手 高本 昇
昭和二十九年十月十五日付
学校法人関西大学助手規定第八条により任期満了になるも同条及第参条により再任を命ずる 助手 有田 稔
昭和二十九年十一月一日付
昭和二十九年度後期本大学法文学部講師を委嘱する 馬場 吉行
昭和二十九年十一月十六日付
本大学助教に任じ文学部勤務を命ずる 講師 玉木憲志太宰

海外の大学より

ハーヴァード大学法学部より

図書寄贈

本学と学術図書及「関西大学法学論集」等の交換を行っているハーヴァード大学法学部より、この程左記学術誌が寄

贈された。

Harvard Law Review,

Vol. 65, Nos. 2, 3, 4.

なお、本学からは西本寛一博士著「社会法論」(新刊)等を贈った。

カリフォルニア大学寄贈圖書

本学と定期刊行物の交換を行っているカリフォルニア大学より、左記圖書が寄贈された。

STATISTICS:

J. L. Hodges, Jr.: The Choice of Inspection Stringency in Acceptance Sampling by Attributes, 1949.
Evelyn Fix: Tables of Noncentral χ^2 , 1949.

J. Neyman: On the Problem of Estimating the Number of Schools of Fish, 1949.

Harry M. Hughes: Estimation of the Variance of the Bivariate Normal Distribution, 1949.

Michel Loeve: On Sets of Probability Laws and their Limit Elements, 1950.

E. W. Barankin & J. Gurland: On Asymptotically Normal Efficient Estimators, I, 1951.

Grace E. Bates & Jerzy Neyman: Contribution to the Theory of Accident Proneness: I. An Optimistic Model of the Correlation between Light and Severe Accidents, 1952.

Grace E. Bates & Jerzy Neyman: Contributions to the Theory of Accident Proneness: II. True of False Contingency, 1952.

NOTE:

All books are issued by The University of California Press.

わが国は終戦后、民主的な文化国家を建設して、世界の平和と人類の福祉に貢献すべく努力していますが、この理想を実現するには教育の力にまたなければなりません。

大学は研究機関であると共に教育機関でありますから、当然この教育基本法の精神に則り、教育を通じてその理想の実現に貢献しなければならぬとおもいます。その一途として大学は社

「特別奨学生制度」について

久井 忠雄

旨にも、大学の側より積極的に寄与することが出来るものと存じます。

会の必要とするいわゆる「天下の英才を得て之を教育」し、卒業後は各種の分野における指導者となるよう配慮いたしますれば、教育的社会奉仕という大学の社会的使命を達成する一助となり得ると信じます。

こゝに本関西大学は、全国に懸け、本年度より「特別奨学生制度」を設け、広く全国各都道府県教育委員会に依頼し、その監督下にある高等学校

より成績優秀にして将来指導者となり得べき能力ある学生を詮衡推薦していただく、入学を許可し、在学中は授業料その他を免除して、ひたすら勉学にいそしめることにいたしました。また本制度の活用により教育基本法第三条の「国及び地方公共団体は、能力があるにもかかわらず、経済的理由によつて修学困難な者に対して、奨学の方法を講じなければならない」との趣旨にも、大学の側より積極的に寄与することが出来るものと存じます。

昭和三十年度特別奨学生の推薦教育委員会及び被推薦高等学校名は左の通りである

入学許可 学部名	推薦教育委員会名	被推薦高等学校名
(一) 文学部	青森県教育委員会	青森県立野辺地高等学校
	栃木県教育委員会	栃木県立真岡農業高等学校
	埼玉県教育委員会	埼玉県立秩父農工高等学校
	群馬県教育委員会	群馬県立沼田高等学校
	富山県教育委員会	富山県立津沢高等学校
	兵庫県教育委員会	神戸市立鈴蘭台高等学校
	岡山県教育委員会	岡山県立笠岡高等学校
	広島県教育委員会	広島県立庄原高等学校
	大分県教育委員会	大分県立宇佐高等学校
	長崎県教育委員会	長崎県立長崎東高等学校
(二) 経済学部	千葉県教育委員会	千葉県立千葉第一高等学校
	静岡県教育委員会	静岡県立新田高等学校
	福井県教育委員会	福井県立丹生高等学校
	岐阜県教育委員会	岐阜県立加納高等学校
	三重県教育委員会	三重県立津高等学校
	和歌山県教育委員会	和歌山県立新宮高等学校
	佐賀県教育委員会	佐賀県立鹿島高等学校
	大阪府教育委員会	大阪府立四条畷高等学校
	滋賀県教育委員会	滋賀県立八日市高等学校
	(短期大学部)	

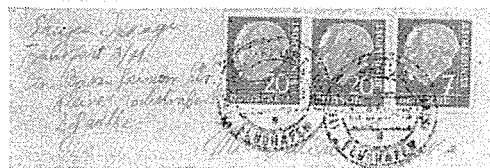
(二) 短期大学部

在外研究員だより

ミイード教授のゼミナールのこと

高 木 秀 玄

(ロンドン通信)



十月十四日木曜日、朝、三菱銀行の下村氏と一緒に下宿を出ようとするとき、玄関の手紙入れに、ミス・ホームーロンドン・スクール・オブ・エコノミックスの秘書より手紙が来ていました。ミイード教授のこの学期

のゼミナールは「The Economic Development of Underdeveloped Countries」をやり特に日本を取扱うから、出席してはどうかとのことでした。十時からのアレ

ン教授の応用統計学のゼミナールに出席し、いつものように、研究室へ入って午後五時までラスパイヤーの物価指数の最初の論文—これはこの大学が誇るゼボンス文庫の一冊です。その他にミル文庫ウェブ文庫もあります—を出来るだけ丹念にコッピイしました。

五時十分前に、第二三七番教室へ参り、時間の来るのを待っていました。教室の中を見渡すと、どうも、私と同様に、東洋人が多いようでした。私の肩をたたく人がありふりかえつてみますと、ブリティッシュ・カウンスルの留学生として来ている慶応大学の矢内原君—矢内原東大の息—でした。しばらくして若い助手と一緒にイギリス人としては余り背の高いくない、トビ色の髪をきれいにわけ、金ブチ眼鏡のミ

イード教授が入つて来られました。何処かで見たことのあるようなお顔だと思いましたが日本の田舎の大地主によくある顔です。まずこのゼミナールの進め方について、説明をされました。それによると次のようなプログラムが組まれています。

十月十四日 W・G・ビースレー氏 政治的要因
十月十五日 R・P・ドーア氏 社会的構造と経済的發展
十一月十一日 D・V・グラス氏 人口論的変動
十一月二十五日 未定
十二月十三日 G・C・アレン氏 経済的見地

さて、ビースレー氏がミイード教授の指図で、教壇へ立ちました。どうも、まだ英語が耳馴れしていませんので、不十分ですが、今、ノートを出してみますと、次のような順序で発表されました。

近代日本
A 徳川社会 (Tokugawa Society) — (1603-1868)
B 明治維新 (1868) — 將軍政治の崩壊
(i) 封建制度の経済的没落
(ii) 藩閥連合による幕府への反抗
(iii) 反封建革命 (anti-feudal revolt)
(iv) 勤皇思想
(v) 西洋よりの影響

C 面期的変動期 (1868-1900) この時ビースレー氏は盛んに「Westernisation to save Japan from the West」という言葉を使っていました。

D 拡張と列強との競争時代 (1900-1930) 専ら財閥と軍閥との結合を説き一九二〇年の政黨政治の開始について述べていました。特に「明治憲法の制度的な四人指」(institutional stratification of Meiji Constitution) という言葉を使っていました。

E 反動時代—軍閥の拡張—滿洲事変 (一九三一年) 日華事変 (一九三七年) 第二次大戦 (一九四一年) 敗戦 (一九四五年) どうもその解釈の仕方には、全面的に肯定出来ないものがありますが、聴講している人達はとても熱心でした。六時で打ち切り、後は三十分討論に入るのですが、日本は非常にナショナリズムの強い国であるが、どうして機械をはじめ多くのものを輸入するのかという質問もありました。私の直感ですが、東洋の人々は矢張り日本というものの短い歴史の期間に於ける発展ぶりに、非常に関心を持っているようです。

終つてからミイード教授にあいさつに行きました。が、ニコ／＼と笑つて握手の手をさしのべられ「ミス・ボームとプロフェッサー・アレンより、あなたが来ていることを聞いていました。一度、ゆっくり御逢いしましょう」といつて、今月の発表者ビースレー氏にも紹介してくださいました。教室を出る時、見知らぬイギリスの学生から日本語で「面白かったですか?」と訊ねられ、びっくりしました。日本を出発して以来、外国人の日本語を初めて聞いたわけです。

クローク・ルームで帽子とコートを受けとり、ホウトン通りへ出ましたら、もう真つくらでした。キングス・ウェイをあるき、地下鉄のセントラル・ラインのホルボーンの駅へやつて来て夕刊を買い、一シルニペンスで切符を求めて毎日のように車に乗りました。二・三日前ソ連の陸上競技チームを迎え、イギリスチームと試合のあったホワイト・シターのスタジアムの直ぐ傍らを走り七時五十分頃、イエーリング・ブロードウェイ駅に到着し、ブラ／＼下宿まで戻りました。

(一九五四年十月十五日コルフットノロードの下宿に)
(経済学部教授)

学生



スケート各部の活躍があつたに止まり、大部分は新年度、新入部員を加へてのシーズンに入っている間、その活動を中止している。

ホッケー部

昭和二十九年全日本ホッケー選手権大会は一月二十三日より広島、山陽、皆実高校グラウンドで開幕したが、本学現役を主力とし、それに先輩を加えた関大クラブは、第一回戦不戦勝の後、第二日、全明大と対戦してこれを敗り、続いて最終日には法大と接戦、同点となつたが幸運にも抽選戦、引続いて行われた決勝戦には、宿敵明大に前半1点先行されながら、後半猛烈なファイトで優勝候補の筆頭明大を破り念願の全国制覇をなし遂げた。

今大会の戦績は次のようであつた。

1月23日 準々決勝 5 (1410) 0 全明大 於山陽高校グラウンド	1月24日 準決勝 2 (1111) 2 法大 於山陽高校	1月24日 決勝 2 (2011) 1 明大 於山陽高校
--	---	--

スキー部

シーズンに入ると共に青森県、大鰐温泉に合宿し、強化に努めた当部は一月十二日の第二十八回全日本学生一月二十一日の関西学生、一月二十七日よりの第四回近畿スキー選手権大会兼二府三県（大阪・京都・兵庫・滋賀・奈良）対抗競技大会に参加したが、同部は全日では合宿の疲れから余力振れなかつた。次いで行われた関西学生選手権では優勝、近畿大会では大阪代表として出場、優勝した。又三月中旬には大部分が国体に参加するが、今から同部の健闘が期待されている。では今迄の戦績を振り返つて見よう。

全日本学生選手権は一月十二日より青森県大鰐で開催本学は五日を通じて、オ一、二日得点なく

オ三日 耐久競技後藤司、上野秀雄5・6位に入賞3点

オ四日 長距離阿部賢が6位1点

オ五日 リレー3位4点

総得点 五日間通算 8点を獲得 一部で6位であつた。

全関西学生選手権は二十一日より三日間、長野県野沢温泉で行われたが各種目に大量得点をあげ、八連勝をなしとげた。

オ一日 滑降競技 一位 岸 弘 五位 竹江

耐久競技 一位 後藤 司 二位 阿部賢

オ二日 長距離競技 一位 上野秀雄 二位 阿部賢

回転競技 一位 岸 弘 三位 竹江
四位 佐々木 五位 井口
オ三日 複合競技 四位 平 山 五位 藤谷
飛 躍 二位 藤谷 三位 平山
リレー競技 一位 本学（加藤、上野、加川、阿部）
三日間総得点 一位本学 七九点七五を獲得した

アイス・スケート部

第三回関西学生選手権、最終日、ホッケー決勝戦本学対同大戦は十七日午後七時半から京都アリーナで行われたが、二回にわたる延長戦の末遂に同大を敗り二連勝をなし遂げたが、二回戦以後の戦績は次の通りである。

1月十四日 二回戦 本学 29 (12710) 0 大工大 於アサヒアリーナ	1月十六日 準決勝 本学 12 (1410) 0 大南大 於梅田リンク	1月十七日 決勝 本学 9 (1211130) 7 同大 於京都アリーナ
--	---	--

昭和三十年三月十五日発行

関西大学學報 第二七七號

大阪市長柄中通三丁目二番地
編集兼 久井 忠雄
発行人

大阪市長柄中通三丁目
印刷所 株式会社 ナニワ印刷所
電話堀川 三三〇二番

大阪市長柄中通三丁目
電話堀川 三三〇二番

大阪市長柄中通三丁目
電話堀川 三三〇二番

大阪市長柄中通三丁目
電話堀川 三三〇二番

大阪市長柄中通三丁目
電話堀川 三三〇二番

大阪市長柄中通三丁目
電話堀川 三三〇二番

大阪市長柄中通三丁目
電話堀川 三三〇二番

大阪市長柄中通三丁目
電話堀川 三三〇二番

「学生はなぜあなたの大学を選んだか」

— アメリカ「大学PR雑誌」より —

「学生はなぜあなたの大学を選んだか」

表題はアメリカ大学PR協会（本学は同協会の特別考慮により正会員となった日本で唯一の大学である）の雑誌に掲載されたC・L・シェーマー（ミシガン州立大学）の論文名である。

（Clarence L. Schoemer: Why They Choose Your College, "College Public Relations Quarterly" Volume 4, Number 4, July 1963）

この論文は大学への進学適齢期にある学生らが、どの程度の学力、どんな条件で、どんな大学を選ぶか、というような問題について実証的分析を行ったものであるが、特にミシガン州立大学で新入生一、〇〇〇名に四十八の質問を發して、その入学希望の動機になった諸理由について統計的データを出しているのは興味深い。

勿論アメリカでの話で日本とは若干異なるであろうが、進学適齢期にある青年の心理には、どこか似通うところがあり、またアメリカにおいても学者になるという学生より、一般に社会へ出て役に立つ知識や教養を修得しようという学生の方が遙かに大多数を占めている（ヒッツバーグ大学学報一九五四年所載）。

現状を考慮に入れると、学生への入学政策や、ひいては一般社会へのPR政策等において、わが国の大学にも何かの参考になるかとおもつて質問表をここに掲載する。（転載に当りアメリカ大学PR協会の好意に深謝する。）

（出版部）

質問及解答集計表

備考：（Ⅰ）は最も重要なものの一つ、（Ⅱ）は採りあげてもよい程の重要性、（Ⅲ）は重要でないもの、等を、また数字は解答数をあらわす。

	(Ⅰ)	(Ⅱ)	(Ⅲ)
カリキュラムが私の要求に適している	574	308	118
生涯の仕事と選んだ分野に関して優れた課程が設けられている	522	309	169
友達や父兄などと学園を訪れた	467	225	308
ミシガン州立大学の教育プログラムは先見の明があり進歩的である	462	398	140
学費が妥当である	386	413	201
学園が美しく、大学はこうであつて欲しいという私の希望に一致している	371	435	194
ミシガン州立大学の学生は親しみ易いとの評判が高い	325	450	225
私の家の近くにあつて、屢々家へ帰ることが出来る	315	315	370
ミシガン州立大学は学問的レベルが高い	314	495	190
最初の二ケ年間に一般教育をうけることの出来る基礎学部（Basic College）がある	289	413	298
学生クラブ会館、寄宿寮、校外寮やスタディアム等の新しい建物			
は近代的で魅力的な環境を醸し出すのにあづかつて力がある	282	481	237
ミシガン州立大学は運動で全国に名声が高い	218	372	410
専門分野を決定しないで二ケ年大学生活が出来る	216	228	556
学費の一部を賄ってくれる育英資金をもらつた	209	44	747
ミシガン州立大学での社会生活はすばらしい	184	502	314
テニス、水泳、スケート、ボート等リクリエーション設備			
が実によい	181	456	363
十大運動競技が見られる	173	366	461
ミシガン州立大学運動チームの一つに加入したい	153	125	722
ミシガン州立大学は学期制度でなく学年制度である	149	265	586
ミシガン州立大学の入学条件が気に入つた	149	236	615
補導部は在学中いろいろと面倒をみてくれるという評判が高い	147	397	456
夏期でも診察や健康診断をしている	147	132	721
ミシガン州立大学の広告が地方及び全国新聞に出た	129	363	508
"Carrer Information"（学報）やその他の書物がミシガン州立大学より私の高等学校へ送られている	124	281	595

感謝録

別項記載の通り、母校創立七十周年記念拡充資金寄附を募集致しました処、その趣旨に御賛同下さいまして陸續左記の通り御寄附をいただきました。二月十五日迄に拝受しました御寄附者の芳名を爰に録し、謹んで感謝の意を表します。

昭和三十年二月

学校法人 關西大學

關西大學七十周年記念

拡充資金寄附者芳名(十二)

昭和三十年二月十五日現在

(順序不同、敬称略)

- 一、篤志家の部(才十一回)
- 金壹万円也 岸田幸雄
金四千元也 八策周吉
- 計 金壹万四千元也
- 二、關係業者の部(才十二回)
- 金貳万円也 天六学舎理髮店
金貳万円也 千里山学舎理髮店
金八千元也 株式会社山越製作所 株式会社山越製作所 大阪出張所
- 計 金四万八千元也 (才一・二回合計額)
- 三、校友の部
- 1、地方支部
- イ 阿倍野支部(才一回)
- 金貳拾万円也 白川朋吉推 薦
金貳万円也 関 豊馬(昭44 専法)
金壹万円也 江村 至身(大12 専法)
金壹万円也 河合 中昭(昭12 大法)
金壹万円也 中村 公男(大2 専法)
金壹万円也 長沢 健一(昭8 大経)
- 計 金貳拾六万円也
- ロ 神戸支部
- 金壹万円也 岸田幸雄(篤志家)
金壹千元也 相沢正二(昭10 専二法)
- 計 金壹万壹千元也
- ハ 川辺支部
- 金八千四百円也 玄野貞吉(大6 大法)
- 計 金八千四百円也 (才一・二回合計額)
- ニ 徳島支部
- 金壹千元也 千草信男(昭20 専商)
- 計 金壹千元也
- ホ 鳥取支部(才二回)
- 金貳千元也 山下文治郎 推 薦
金貳千元也 大田 豊治(昭11 専二法)
金壹千元也 田中 浩道(大13 専商)
金壹千元也 武田 英雄(昭19 大政)
金壹千元也 山田 豊三郎(昭16 大法)
金壹千元也 西川 佑昭(昭19 大経)
金壹千元也 橋本喜一郎(昭16 専二商)
- 計 金壹万四千元也

- 2、職域会
- 毎日新聞社開大会
- 多河美一 杉本龜久
松谷芳郎 泉英一
桐井吉郎 島田正
沢谷義明 島田直
伊谷久義 島田治
木村宗雄 島田泰
木島利昇 廣田良
北谷吉清 古沢良
京谷利通 廣田良
飯盛秀泰 高橋新
新道義雄 石黒通
吉村俊彦 谷垣泰
称野治兵衛 福原正
中西宏一 林信博
田中吉太郎 吉川静
中保辰雄 山本隆
久保俊彦 河本隆
浅本一 山本隆
山本一 山本隆
松山一 山本隆
片桐健次郎 篠原茂
熊田健次郎 篠原茂
河野正潔 岩井宣
春元信正 宮川保
北井善夫 中久保
表田周治 吉井西
前田三郎 塩井正
向井三郎 塩井正
中井三郎 塩井正
- 計 金壹万四千元也
- 3、同窓会
- 同窓会
- 金壹万五千元也 孫田茂雄(昭17 関甲)
金五千元也 関山正守(大15 関甲)
金五千元也 工藤省三(昭25 一中)
金貳千元也 岡本初行(昭2 関甲)
- 計 金九拾四万六千元也
- 4、個々人
- 金参千元也 大谷調将(昭28 短大)
金参千元也 山田耕助(大11 専商)
金壹千元也 横田剛(昭25 大法)
金壹千元也 平井治(昭27 学法)
- 計 金八拾参万参千五百円也
- 四、教育後援会の部
- 金八拾参万参千五百円也
- 金九拾四万六千元也
- 金壹万五千元也 中尾輝和
金壹万五千元也 寺沢貞次郎
金壹万五千元也 永礼重
金参千元也 松並義治
- 計 金九拾四万六千元也 (以下11頁下段へ)

關西大學創立七十周年記念 拡充資金募集趣意書

わが關西大學は、明治十九年河内町の一隅に、大阪に於ける唯一の法律學校として開校したのでありますが、爾來六十有餘年校友先輩の苦心と不斷の努力に依つて目覚ましい發展を遂げ、今や一萬数千の学徒を擁する私學の雄として、自他共に許す一大學園となりました。其の間幾多の俊英を輩出して、文化の向上、國家社會の進運に大きな寄与をなしたことは、われわれの深く喜びとするところであります。学園發展のために尽瘁せられたそれらの先輩各位に対しては深甚の敬意と感謝を捧げずには居られません。

日本は、漸く獨立國家として出発しましたが、國家の前途は甚だ多難であります。わが國は今後、文化國家として世界文化に貢獻すべきであります、またそれによつて友邦の信に應えなければなりません、そのために、教育の振興こそ最も緊要な問題であります。

本學は、大學の崇高な使命を自覺すると共に、歴史と伝統に立脚して、よくその声価を揚げて参りましたが、真理の討究、學の實化という理想に向つて、益々邁進したいと思ひます。本學が新學制に基き、各大學にさきがけて、大學院を設置し、修士課程並びに博士課程を開講したのも要は、その意味において將來の飛躍的な發展を意圖したからに外なりません。

本學は時代の趨勢に鑑み、曩に五ヶ年計畫を樹て、諸施設の改善充実に着手致しました。千里山における大學院、大學ホール、経済学部 商学部教室の増築等は、その一環として既に竣工しましたが、なお計畫中の事業で、しかも緊急を要するものが種々残されて居ります。即ち、使用上すでに危険な状態にある、千里山法学部 文学部學舎の改築、二部學生を收容するための天六學舎の増築、學生に対する施設の一部分として、千里山尚志館（學生食堂學友會部室）の増改築等でありますが、これらは逐次工事に着手し或は着手準備中であります。また教授研究室は、現在六十五室を有するに至つたのでありますが、その大部分は、臨時的なもので、更に近代設備を持つ研究室の新築を構想中であります。これらが竣工の暁には學園は全く面目を一新すると思ひます。

こうした外觀の整備と相俟つて、特に重要なものは、大學の眞価を決する教授陣容の充実にあります。二十八會計年度においては教授十名、助

教授八名、専任講師五名、助手十七名の増員を予定しましたが、その大半はすでに補充致しました。

教職員待遇については、常にこれが改善に努め、本年度においても相當額の増俸を実施致しました。しかしなお現下の經濟狀態に即応すべき所期の目的を十分に達し得て居ないのを遺憾と致します。

教授陣容の充実に共に、研究用圖書の完備も大切であります、この点についても目下鋭意努力して居ります。

さて、上記の事柄は、いづれも緊急を要するもののみと考えられますが就中、學舎の増改築は、最早一日も遷延を許しませんので、これを早急に達成するため、昭和三十年度に創立七十周年を迎えるのを機会に、その記念事業の一部として実施することに致しました。しかも、建築費だけでも総額約三億円を要するのでありますが、戦後の經濟的混亂により本大學法人の經理も、種々困難な事情を加えており、従つて事業遂行の資金は、止むを得ず關係者各位その他の御援助により御醸出を仰がねばならぬ実情にあります。

大學の生命は不朽であります、学園の生々發展を希うためには、各位の学園に寄せられる深い愛情と熱意に俟たねばなりません。翼くは、学園の繁榮を念願する各位の御賛同を請ひ、この七十周年記念事業の完成を期したいと思ひます。各位の御賛同により本事業完成の暁には、学園はさらに新たな基盤に立つて飛躍的な發展を期し得ることを信じます。何卒御協力の程切に願ひ上げます。

昭和二十八年十一月

關西大學學長 岩崎 朋吉
關西大學理事 白川 一

創立七十周年記念事業學舎増改築概要

一、工事費總額約三億三千五百萬元

二、工事概要

- (一) 千里山法学部 文学部學舎改築（鉄筋コンクリート造）
 - 三階建 一千六百六十八坪 工費約二億六千四百萬元
- (二) 天六學舎増築（鉄筋コンクリート造）
 - 五階建 三百七十八坪 工費約三千萬元
- (三) 千里山尚志館増改築（木造）二階建 三百二十一坪 工費約六百萬円
- (四) 關西大學第一高等學校の千里山外苑への移転新築（一・二階鉄筋三階木造）三階建 七百八十五坪 工費約三千五百萬元

附錄

擴充資金寄附者芳名（第一—十二回）

昭和三十年一月十五日現在

(牙一回一十回)

後藤 桂
上村 二郎
米田 三治郎
米谷 允利
富山 俊夫
東野 武三
牧田 繁雄
稻葉義之助
門田 文三
白井 利久
匿名 氏
杉森 弘
吉崎 照夫
三ツ橋邦治郎
松岡 一美
中村 武彦
今西 某
島野繁太郎
鳥居昇二郎
匿名 氏
関西大学滋養部
井上為之助
岡野 弘毅
不破晴三郎
福井鉄次郎
小谷 正治
堀本清太郎

牙 一 回 一 回

金參千円也	三宅 八重
金貳千円也	阪本 政弘
金貳千円也	北京樓 朱相奎
金貳千円也	中西 忠雄
金壹千円也	鳥居 觀之
金壹千円也	大森松太郎
金壹千円也	中辻 秀吉
金壹千円也	中江 義文
金壹千円也	泓川 義文
金壹千円也	木島 弘晴
金壹千円也	寺嶋宗一郎
累計金八百八拾万壹千五百円也	

倉山診療所

金壹萬四千円也	株式會社青井黒坂製作所
金壹萬參千円也	日水工業所
金壹萬円也	中島印刷工場
金壹萬円也	株式會社ヤマト商店
金壹萬円也	坂田印刷株式會社
金壹萬円也	波田文具店
金壹萬円也	田口産業株式會社
金五千円也	久保木材株式會社
金五千円也	浜田康
金五千円也	フロアー商会
金五千円也	日本板印刷株式會社

金參千円也 丸榮木材工業株式會社
金參千円也 田中クリニング所
金貳千円也 清水工業所
金貳千円也 島村 莊
金壹千円也 垣津硝子店
金壹千円也 渡辺商店
金壹千円也 高石 秀夫
金壹千円也 躍 仙堂
金壹千円也 株式會社山越製作所
累計金七百五拾參万九千五百円也
(第一回)

三、校友の部

本重治

金壹万円也	金壹万円也	金壹万五千円也	金貳万円也	金貳万円也	金貳万円也	金貳万円也	田中一郎
海野 円城	梅原貞次郎	今里 達雄	丸山喜三造	保井 剛一	村尾 静明	多賀谷 宏	
		四辻 律夫	大月 仲				

金五千円也 野田 文雄
金五千円也 橋田 豊吉
金五千円也 山影 耕三
金五千円也 毛尾 泰三
金五千円也 神吉 雅一
金五千円也 金田 雅一
金五千円也 鳥羽 源四郎
金五千円也 中村 敏雄
金五千円也 小田 茂就
金五千円也 清藤 義夫
金五千円也 近藤 友房
金五千円也 吉村 種藏
金五千円也 安藤 一郎
金五千円也 町田 四郎
金五千円也 前田 常好
金五千円也 福村 敏雄
金五千円也 金本 朝一
金五千円也 國垣 敏一
金五千円也 吳 辰成
金五千円也 高木 茂雄
金五千円也 三木 甚太郎
金五千円也 石田 俊夫
金五千円也 中沢 俊雄
金五千円也 石原 孫市
金五千円也 累計 金貳百八十四千円也

金貳千円也 田口 正春
金貳千円也 倉橋 貞一
金貳千円也 武田 謙
金貳千円也 富川 竹治郎
金貳千円也 松島 章
金貳千円也 伴 久平
金貳千円也 井上 千里
金貳千円也 長崎 友一
金貳千円也 中平 忠
金貳千円也 今仲 美巳
金貳千円也 井上 精一
金貳千円也 累計 金貳拾參万壹千円也

金貳千円也 瀬郷 清市
金貳千円也 鳥居 觀之
金貳千円也 大森 太郎
金貳千円也 中辻 卯吉
金貳千円也 泓川 義文
金貳千円也 中江 秀実
金貳千円也 林 義夫
金貳千円也 大野 幸雄
金貳千円也 松岡 行雄
金貳千円也 高橋 久次
金貳千円也 鳥村 猪之助
金貳千円也 山本 鎮郎
金貳千円也 貴客 喜郎
金貳千円也 赤井 定雄
金貳千円也 塚本 勝
金貳千円也 榎本 昭
金貳千円也 高野 俊春
金貳千円也 小原 弘
金貳千円也 氏林 清
金貳千円也 小川 光朝
金貳千円也 井沢 立朝
金貳千円也 吉原 国雄
金貳千円也 累計 金貳拾貳万四千円也

金貳千円也 鈴木 康之
金貳千円也 梅田 茂
金貳千円也 藤本 龜
金貳千円也 樺島 明
金貳千円也 垣田 八郎
金貳千円也 丸物 彰
金貳千円也 累計 金拾四万九千円也

金五千円也 松尾 高一
金五千円也 浜本 正吉
金五千円也 山田 重治
金五千円也 吉田 太郎
金五千円也 貴村 一雄
金五千円也 橋谷 弘
金五千円也 岩崎 茂夫
金五千円也 杉尾 元茂
金五千円也 計 金八万五千円也

2

金壹千円也	金壹千円也	金壹千円也	金壹千円也	金壹千円也	金壹千円也	金壹千円也
安本	近藤	山崎	成川	脇田	小寺	龍田
富夫	忠二	福太郎	政雄	昭成	和男	弘務
佐本	達彦	忠二	政雄	昭成	和男	弘務
八木	佐藤	磯石	鎌田	窪田	八木	三浦
初男	正隆	義一	務弘	義一	正隆	初男

金壹千四也	平次
金壹千四也	大橋 秀夫
金壹千四也	明石 一郎
金壹千四也	國府寺展美
金壹千四也	藤井 鶴雄
金壹千四也	宮本 恒夫
金壹千四也	宮原 宏雄
金壹千四也	南村 政春
金壹千四也	木村佐喜夫
金壹千四也	坂本 三郎
金壹千四也	今川 美夫
金壹千四也	葉久利

計 金五万也	金壹千四也	近藤晋一郎
計 金五万也	金壹千四也	臥未誠彦
	金壹千四也	北本誠一
	金壹千四也	仲利博
	金壹千四也	平井龍之助
	金壹千四也	西川新造
	金壹千四也	神野宣留
	金壹千四也	野村正男
計 金拾万也	金壹千四也	西田市一
(ハ) 兵庫県庁秀麗会		
金五万也		

金貳万円也	木原	繁実
金五千円也	菅原	一夫
金参千円也	大谷	盛弘
金壹千円也	山崎	義夫

4

金參千円也 岩崎 義雄
金壹千円也 小山 修
累計 金四拾七萬八千円也
(二) 昭七 会(才二回)
金五万円也 春原源太郎
金五万円也 西尾孝太郎
金貳萬五千円也 戸根泰雄
金貳萬円也 米田 恒治
金貳萬円也 越智比古市
金貳萬円也 藤原 忠義
金貳萬円也 丸山喜三造
金貳萬円也 藤山 昇
金貳萬円也 永田菊次郎
金貳萬円也 井元 拙夫
金貳萬円也 東田 博雄
金貳萬円也 玉中 啓一
金貳萬円也 岩佐清三郎
金壹萬円也 吉米 由雄
金壹萬円也 國師 親徳
金壹萬円也 前田 滝造
金五千円也 武田 太七
金參千円也 岸井 八東
金參千円也 行俊 壽
金參千円也 市川 尚文
金參千円也 谷口奈良男
金參千円也 竹内幸一郎
金壹千円也 高橋 良典
金壹千円也 益田 寅男
累計 金參拾六萬八千円也
(永) 昭三 会(才一回)

金壹萬円也 川野 文也
金五千円也 米岡 榮三
累計 金拾壹萬円也
(下) 四三 会(才二回)
金五万円也 下条小野右衛門
金參萬円也 原田鹿太郎
金壹萬円也 滝川 幾
累計 金九萬円也
(才) 三七 会(才一回)
金貳萬円也 内藤 正剛
金貳萬円也 村尾 静明
金壹萬円也 深川 重義
金壹萬円也 兼松謙太郎
金壹萬円也 豊岡 正芳
金五千円也 藤高 豊作
金五千円也 上田 実
金壹千円也 田中三喜藏
金壹千円也 赤坂 惠龍
累計 金七萬八千円也
八 春秋会(昭十四大才)

金貳萬円也 坂本 龍夫
金貳萬円也 今里 達雄
金五千円也 井上 晴男
金貳千円也 辻 忠隆
金貳千円也 波田野 福雄
金貳千円也 榊原 良尚
金貳千円也 久保孝三郎
金貳千円也 山崎 弘
金貳千円也 馬川喜久三
金壹千円也 安部 彰一
金壹千円也 小松 邦男
金壹千円也 田山 久美
金壹千円也 九尾 実
金壹千円也 早助 芳一
金壹千円也 石田 俊夫
金壹千円也 平田 光男
金壹千円也 松下 貞男
金壹千円也 山形 貞男
累計 金六萬六千円也
(才) 昭十一年 会(才一回)
金貳萬円也 木原 繁英
金貳萬円也 瀧川 鶴藏
金參千円也 辻本 修
金參千円也 大野 茂
金參千円也 森本 盛男
金參千円也 大谷 盛
累計 金四萬貳千円也
(元) 大三 会(才一回)

金壹千円也 生島 藤藏
計 金參萬八千円也
ホ 喜楽会(昭十五専卒)
金壹萬五千円也 鐵井良男
金參千円也 太田 正孝
金壹千円也 天野 正
金壹千円也 芝村 久壽
金壹千円也 橋本 幹男
金壹千円也 伊藤 武夫
金壹千円也 赤尾 正義
金壹千円也 楠部 保一
金壹千円也 藤井 研一
金壹千円也 田中 正巳
金壹千円也 青木 孝夫
累計 金貳萬七千円也
計 金貳萬八千九百九千円也
【4】同窓会
(才) 関甲俱樂部(才二回)
金拾八萬円也 久井 忠雄
金五萬円也 西村治三郎
金參萬円也 長田 義一
金參萬円也 増田 三郎
金貳萬円也 川上 敬造
金貳萬円也 島田 藤平
金貳萬円也 中尾 弘
金貳萬円也 橋本 亮一
金貳萬円也 山本 紀男
金壹萬五千円也 山本 三郎
金壹萬五千円也 木戸 一郎
金壹萬五千円也 北川 保
金壹萬五千円也 北川 喜八郎
金壹萬五千円也 園田 榮一
金壹萬五千円也 園田 順藏
金壹萬五千円也 園田 吉次
金壹萬五千円也 那 榮作
金壹萬五千円也 鈴木 正男
金壹萬五千円也 高橋 正治
金壹萬五千円也 東耕 龍男
金壹萬五千円也 宗須野 一郎
福原菊治郎

金壹萬円也 古市 実
金壹萬円也 山口 繁雄
金壹萬円也 山田 貞一
金壹萬円也 島田 健一
金壹萬円也 長沢 仁作
金壹萬円也 津田 榮治郎
金壹萬円也 津本 泰秀
金壹萬円也 浅野 等
金壹萬円也 神吉 敬治郎
金壹萬円也 中村 敏治郎
金壹萬円也 山本 栄次郎
金壹萬円也 山中 林三
金壹萬円也 好井 喜道
金壹萬円也 吉田 正守
金壹萬円也 西岡 寅
金壹萬円也 岩田 利男
金壹萬円也 桑原 正安
金壹萬円也 小枝 康益
金壹萬円也 小栗崎 夫
金壹萬円也 杉江 弘臣
金壹萬円也 高橋 静雄
金壹萬円也 西川 義雄
金壹萬円也 山本 三郎
金壹萬円也 吉富 三郎
金壹萬円也 井上 昌三
金壹萬円也 木村 七郎
金壹萬円也 松本 喜代松
金壹萬円也 森下 清
金壹萬円也 山本 富和
金壹萬円也 山本 和夫
金壹萬円也 猪師 猛
金壹萬円也 貴村 一雄
累計 金七拾參萬六千円也
(口) 関大ニ商同窓会(才一回)
金五萬円也 前田 軍治
金參萬円也 丸山喜三造
金貳萬円也 福岡 彰郎

8

9

10

11

金壹千円也 田中 余義
金壹千円也 上西 祥太
金壹千円也 寺田 裕一
金壹千円也 岩田 徹
金壹千円也 恒次 登喜一
金壹千円也 山口 誠一
金壹千円也 富田 誠一
金壹千円也 岡崎 静雄
金壹千円也 淡谷 幸三郎
金壹千円也 京谷 幸三郎
金壹千円也 渡辺 岩五郎
金壹千円也 無量 井与市
金壹千円也 上田 定雄
金壹千円也 横山 憲三
金壹千円也 中多 彌三郎
金壹千円也 浦島 三治
金壹千円也 伊藤 金三
金壹千円也 榎林 金三
金壹千円也 亥林 金三
金壹千円也 猪瀬 泰三
金壹千円也 杉本 信太郎
金壹千円也 松岡 秀太郎
金壹千円也 吉田 嘉一
金壹千円也 平野 柳太郎
金壹千円也 深見 良一
金壹千円也 奥田 健三
金壹千円也 柳本 盛
金壹千円也 町田 武忠
金壹千円也 今井 辰雄
金壹千円也 岡崎 豊進
金壹千円也 大野 佐代
金壹千円也 山本 佐代
金壹千円也 岩井 助一
金壹千円也 島屋 義雄
金壹千円也 常松 龍造
金壹千円也 酢屋 久一
金壹千円也 向田 夏彦
金壹千円也 家納 探五郎
金壹千円也 新井 賀策
金壹千円也 庄司 繁太郎
金壹千円也 西田 好太郎
金壹千円也 武田 長衛門

金壹千円也 重山 治三郎
金壹千円也 曾根 喜代一
金壹千円也 川崎 常太郎
金壹千円也 原田 尚志
金壹千円也 米田 伊三郎
金壹千円也 桑原 新太郎
金壹千円也 秋田 辰治
金壹千円也 練尾 錦一郎
金壹千円也 北瀬 準二
金壹千円也 小井 弁志
金壹千円也 福原 保三
金壹千円也 柏原 浅治郎
金壹千円也 塩川 政一
金壹千円也 白井 甚吉
金壹千円也 中田 龍喜
金壹千円也 坂本 宗一郎
金壹千円也 中島 あき子
金壹千円也 田中 豊三郎
金壹千円也 室谷 勘藏
金壹千円也 古川 雅三
金壹千円也 大野 武夫
金壹千円也 益野 政吉
金壹千円也 新沼 政勝
金壹千円也 今里 要之助
金壹千円也 辻 要之助
金壹千円也 前田 利三郎
金壹千円也 溝淵 伊三郎
金壹千円也 栄島 重成
金壹千円也 生島 信藏
金壹千円也 岡本 富藏
金壹千円也 坂部 時雄
金壹千円也 上野 留次郎
金壹千円也 田中 晋吉
金壹千円也 山森 一郎
金壹千円也 北村 佐一郎
金壹千円也 吉見 勇三
金壹千円也 真住 吉三
金壹千円也 藤井 俊吉
金壹千円也 森内 良次
金壹千円也 森岡 良次

金壹千円也 江見 実
金壹千円也 中西 喜一郎
金壹千円也 森田 正太郎
金壹千円也 今村 松太郎
金壹千円也 藤原 二男
金壹千円也 藤岡 安吉
金壹千円也 内藤 清太郎
金壹千円也 田中 清二
金壹千円也 日笠 清二
金壹千円也 石井 忠興
金壹千円也 小野 留次郎
金壹千円也 上野 留次郎
金壹千円也 福島 信子
金壹千円也 河野 晴一
金壹千円也 西本 岩吉
金壹千円也 西村 久藏
金壹千円也 大柴 信夫
金壹千円也 鈴木 良夫
金壹千円也 渡辺 六明
金壹千円也 松久 保藏
金壹千円也 堀尾 政雄
金壹千円也 堀川 政雄
金壹千円也 川岸 一郎
金壹千円也 八木 正一
金壹千円也 前川 常吉
金壹千円也 稻葉 幸市
金壹千円也 真下 百之助
金壹千円也 中村 政一
金壹千円也 大河内 豊城
金壹千円也 久保 谷由美
金壹千円也 横田 輝夫
金壹千円也 岸田 年彦
金壹千円也 石見 研二
金壹千円也 大西 辰五郎
金壹千円也 高橋 英雄
金壹千円也 野口 忠二
金壹千円也 田中 雅藏
金壹千円也 柳下 幾太郎
金壹千円也 塚由 石藏

金壹千円也 田井 戸信太郎
金壹千円也 田中 九一
金壹千円也 吉村 卯三郎
金壹千円也 中野 順一
金壹千円也 中元 榮吉
金壹千円也 杉本 忠太郎
金壹千円也 増田 清真
金壹千円也 森野 市太郎
金壹千円也 脇田 米一
金壹千円也 吉久 修
金壹千円也 青木 彌太郎
金壹千円也 川口 勲太郎
金壹千円也 山口 角太郎
金壹千円也 深尾 政雄
金壹千円也 杉本 岩吉
金壹千円也 木本 静久
金壹千円也 和田 久雄
金壹千円也 秋田 憲三郎
金壹千円也 小郷 綱次
金壹千円也 藤原 久之吉
金壹千円也 浅井 龜太郎
金壹千円也 樋口 多美爾
金壹千円也 和田 一夫
金壹千円也 岡野 一夫
金壹千円也 大保 利平
金壹千円也 大保 利平
金壹千円也 奥井 巴之吉
金壹千円也 矢野 辰造
金壹千円也 萩田 雅郎
金壹千円也 林 善三郎
金壹千円也 山本 清造
金壹千円也 石崎 清造
金壹千円也 桐山 熊太郎
金壹千円也 小池 常次郎
金壹千円也 大谷 常次郎
金壹千円也 花岡 重造
金壹千円也 浅香 重造
金壹千円也 宮風 利一郎
金壹千円也 小川 喜太郎

金壹千円也 藤田 宗次郎
金壹千円也 木村 次賢次
金壹千円也 山田 和七
金壹千円也 花岡 肇
金壹千円也 深阪 肇
金壹千円也 莊所 達司
金壹千円也 田中 孝三郎
金壹千円也 山村 伊太郎
金壹千円也 山田 定太郎
金壹千円也 南条 芳夫
金壹千円也 大森 章二
金壹千円也 高瀬 守門
金壹千円也 平瀬 守門
金壹千円也 山田 録吉
金壹千円也 近藤 緒吉
金壹千円也 多田 照夫
金壹千円也 西浦 房一
金壹千円也 江川 重正
金壹千円也 山中 重正
金壹千円也 田中 重正
金壹千円也 森 重正
金壹千円也 岡田 重正
金壹千円也 坂井 三郎
金壹千円也 浅野 三郎
金壹千円也 大城 一三
金壹千円也 奥村 一三
金壹千円也 坂野 一三
金壹千円也 高野 一三
金壹千円也 竹内 一三
金壹千円也 吉田 一三
金壹千円也 吉田 一三
金壹千円也 宮下 一三
金壹千円也 荒井 一三
金壹千円也 清瀬 一三
金壹千円也 酢屋 一三
金壹千円也 近藤 一三
金壹千円也 植野 一三
金壹千円也 常松 一三
金壹千円也 向田 一三

金壹萬四也	荒島辰
金壹萬四也	貴名
金壹萬四也	藤森贊
金壹萬四也	塚田義
金壹萬四也	松原末
金壹萬四也	東川俊
金壹萬四也	飯尾岩
金壹萬四也	片山龜
金壹萬四也	出原一
金壹萬四也	脇田權治
金壹萬四也	塩見徳太
金壹萬四也	佐々木善
金壹萬四也	平井慶
金壹萬四也	國枝正
金壹萬四也	中西信
金壹萬四也	西村忠
金壹萬四也	野村三
金壹萬四也	奈良金
金壹萬四也	木下三
金壹萬四也	多并憲次
金壹萬四也	吉田八
金壹萬四也	鍵田源太
金壹萬四也	高山常
金壹萬四也	森忠三
金壹萬四也	岸本光
金壹萬四也	久保田嘉
金壹萬四也	吉田彌
金壹萬四也	竹中政
金壹萬四也	桑原雄
金壹萬四也	荒木虎三
金壹萬四也	角家大垣
金壹萬四也	北村健太
金壹萬四也	中山左右
金壹萬四也	後田春
金壹萬四也	清水良
金壹萬四也	豊後昇太
金壹萬四也	松下繁三
金壹萬四也	岩本三郎
金壹萬四也	千葉胤
金壹萬四也	毛利喬

累計金九百參拾七萬七千貳百圓也

[illegible]

